

01

大吉村
有田町丸尾

「売り手」から「作り手」へ 百姓だからこそ広がる可能性



キッカケ

西日本の大型商業施設で、陶磁器の卸・販売を行っていた会社「はさみの大吉」が、コロナ禍を経て農業に参入。「売り手」から「作り手」への転換を目指したもので、会社の周辺に広がる不耕作地がきっかけに。20年以上放置された畑は、そのままでは水害で崩れる危険性があり、「だったら自分たちで耕して、安全で身体にやさしい野菜を作ろう!」、「大切な家族や仲間が集まれる場所を作ろう!」と、令和4年に減農薬の野菜づくりをスタート。参加共有型コミュニティビレッジ「大吉村」を設立しました。



組織概要

「日本一楽しい村を一緒に作りませんか?」がコンセプトの「大吉村」は、村人と呼ばれる会員が集う場所です。家族構成に応じた会費制になっていて、村人は田植えや稲刈りなどの体験や季節のイベントに参加でき、現地に来られない場合は大吉村で収穫された安心安全な野菜や棚田米が届けられます。現在の会員登録は250件ほどで、村人の数は子どもから大人まで600人以上。ちなみに、村の運営スタッフは陶磁器販売会社の元社員のため農業経験はゼロ。有機農業を実践する松本農園(吉野ヶ里町)に通って、農業のいろはを教わりました。



中山間地域での挑戦



● 岳の棚田(有田町)の不耕作地で米づくり

有田町の岳の棚田で農業を営む前田好弘さんとの出会いをきっかけに、棚田の不耕作地を利用した米づくりをスタート。現在、棚田15枚(約90a)を耕作中。平地と比べると田んぼの形はいびつで、機械が入るのがギリギリの場所で危険と隣合わせで作業を行っている。

● 田植えや稲刈りなどの体験や季節のイベントを開催

子どもも大人も楽しめる体験や季節のイベントを定期的で開催。

● 大吉村を大人の再教育の場に

1日1組限定で一般団体の受け入れを開始。学校の課外活動や会社の研修・社員旅行、企業のCSR活動などの場所として活用してもらう。

つながり

自分たちのことを、農業従事者ではなく「百姓」だと語る松尾さん。米や野菜を作るだけの農業とは違い、食を中心とした活動にエンターテインメントの要素を取り入れて参加者の笑顔と元気を引き出しています。「子どもたちが楽しめるように企画したイベントも、大人の方が楽しんでいることが多い」。そのおかげで、大人の村人たちが曜日ごとに大吉村の農作業をサポートするなど自発的な活動も生まれました。豊かな自然と土に触れ、育てる大変さを知り、仲間と作業する楽しさを実感できたからこそこの好循環です。

耕す未来

松尾 光さん

大切な家族や友人に、自信を持って提供できる野菜や米づくりを基準にする大吉村。そんな百姓スタイルに共感する、「百姓」を育てる仕組みを作っていきたいと考えています。「平地の10倍の労力がかかると言われる棚田をトレーニングファームとして活用すれば、短期間で立派な百姓ができていくはず」と松尾さん。人間の暮らしの根っこにあるビジネスの一つが農業です。だからこそ、子どもや障がい者、教育やアートなどさまざまな分野と複合的につなげることで、農業を次のステージに広げたいと考えています。

